

はじめの古文書講座

其の五 於成の手紙を読んでみよう (3)

於成の手紙の⑥行  (此内かけ人形いたつき有

難)から、久光ひさみつが於成に贈ったのは、どんな人形だったのか、考えてみたいと思います。なお、「いたつき」は「いただき」(頂き)と読みます。当時は「かな」に「」濁点を振らないことが一般的でしたので、必要に応じて補って読みます。

一つの読み方としては、「此、内かけ人形」という読み方が考えられます。「此」このの意味が少々取りづらいですが、「内かけ」を「打掛け」と読めば(「内」と「打」で、漢字が違いますが、当時の人は当て字を使うことが多々ありました)、今でも結婚式などで女性が着る打掛けをまとった人形を思い浮かべることができます。一方、「此内、かけ人形」と読むと、「此内」は「先日」という意味がありますので、「先日(頂いた)、かけ人形」ということになります。この場合、「かけ人形」は「影人形」かげ(前述のように「」を補います)(影絵遊びで用いた、人をかたどったもの)と考えられます。このように、「」読点の打たれていない古文書は、解読する人が「」をどこに入れて読むかで内容が変わってしまうことが多々あります。この時の於成の人形が現在に残されていれば、悩むことはないのですが、そうでない以上、詳しいことは不明とせざるを得ません。ただ、いずれにしても、於成はこの人形を気に入ったようで、さらなるおねだりはありませんでした。

次の⑦行⑨行にかけては  (且又)かつまたと、人形以外に贈られてきたものを挙げて、

最後に  (いたつき有難)、  (御礼宜 申

上あげまいらせ候)と記しています。「いただき有難」は人形の件くだりでもありました。そして「申上まいらせ候」は、前回取り上げた表現でしたね。読めたでしょうか。それでは、人形以外に、贈られてきたものを確認しましょう。